

インクルーシブ教育の 輝ける実例

～可能性のスナップショット～



インクルーシブ教育の 輝ける実例

～可能性のスナップショット～

SNAPSHOTS **of** **Possibility**

Shining examples of inclusive education

Researched and written by Micheline Mason and Jackie Dearden

Designed by Chloe Bowles

Published by the Alliance for Inclusive Education

序文

あなたのかかわっている学校がもっとインクルーシブなところになるためにはどうしたらいいか、この冊子を読めば、いくつかの方法があることがわかりになるでしょう。

よりインクルーシブな学校をつくろうとする運動は、20世紀の終わりの20年間を特徴づける、この上なく希望にあふれた特色の一つでした。さらに、21世紀の初めの50年もそうであってほしいと希望し、期待しているところです。

真にインクルーシブであろうとする学校は、互いに関連し合う5つの価値観あるいは原則を行動の指針としようと試みます。

まず第一に、これはいうまでもないことですが、インクルーシブをめざす学校は、「排他的」ではなく、「包括的（インクルーシブ）」な場であろうとします。それが現場で実際にどういうことであるのかという具体的な例が、この短い本のなかに紹介されています。遊び場での実践例、ほうびと制裁、お祝いの行事、言語、カリキュラム、とりわけ人が互いにかかわりあおうとする行動などです。

第二に、上のことにも関連していますが、インクルーシブであろうとする学校にいる人たちは、「知性とは、全体的な、遺伝による、固定したものであるというより、むしろ、多面的なものである」と確信しています。そのために、あらゆる知性を称賛し、また自分たちの努力によって、さまざまな知性を増大させることができると信じているのです。

第三に、成功に限界はない、すなわち、すべての人がそれぞれ異なった成功をおさめることができると確信を持っています。

第四に、インクルーシブをめざす学校においては、「規範的」評価ではなく、「絶対的」評価を使っています。すべての子どもたちは、自分のベストであるところから、もっとよくするようにと奨励されるのです。——それには、しばしば教育評価が使われます。そのため、子どもたちに「優秀」「普通」「低学力」とラベルをつけることには慎重です。

最後に、インクルーシブをめざす学校では、「学習は生涯にわたる」活動であり、「これっきりで終わり」の面倒でつまらない作業ではなく、義務教育で規定されている年限が終われば離れてしまうものというより、むしろ楽しさを感じられる活動であるこ

とを証明しようとしているのです。

当然のこととして、これらの原則が実践されている実例は数え切れないほどあります。

この冊子の優れている点は、教えを説いていないところです。また、疑問を投げかけているのでもありません。ただいくつかの学校で、インクルージョンを実際に行えるように、どのように手段を講じたのかという、生き生きとした実例を提示しています。これを読めば、誰でも、そのような方策を講じたおかげで、クラスや学校がよりインクルーシブで、とても楽しい場になったことがすぐに理解できるでしょう。

ロンドン学校監察官
ティム・ブリッグハウス教授

謝辞

P 16

写真と引用文は、インクルーシブ・ソリューションズ Inclusive Solutions 発行の『【仮邦題】 友だちの輪をつくる Creating Circles of Friends』ワークブック及び DVD より複製しました。

P 17

ジュビリー学校の集会の写真は、ミランダ・ペイネの撮影したものです。インクルージョンを求める親たち Parents for Inclusion の許可を得て複製しました。

P 22

キングスアベニュー学校の写真。

写真家：ピーター・デュラン

建築家：シェパード・エプスタイン・ハンター

P 29

文と写真は、『【仮邦題】 やさしく手で触れる子どもたち Children with a Soothing Touch』の記事よりいただきました。著作権は、『デイリー・テレグラフ』 2004 年 6 月。

P 33

写真は、「…のために手をあげよう Hands Up For…」より複製しています。

ホームページ：www.messengers.org.uk/

P 34

まとめ役 Unity Cru'のロゴは、ジョージグリーンズ学校より許可を得て複製しました。

P 35

写真は、タックスウッド学校からの許可を得て複製しました。

P 36

写真と、引用文は、「トゥルー・ヴィジョン」 ' True Vision ' 製作『【仮邦題】 弱い者いじめを打ち負かす Beating the Bullies』より複製しました。

P 37・P 38

写真は、ノッティンガム市地方教育委員会いじめ対策チーム Anti-Bullying Team の許可を得て、複製しました。

P 38

修復的正義 Restorative Justice の引用文は、ノッティンガム市地方教育委員会の修復会議のコメントバンク Restorative Conference Comment Bank より複製しました。

P 47

エンビジョンの原則 Envision principles は、エンビジョン Envision のホームページより複製しています。

P 48

写真と、引用文は、『インクルージョン・ナウ Inclusion Now』誌 2002 年第 4 巻より複製しました。

他のすべての写真は、ジャッキー・デアダンの撮影です。

イラストは、ミシェリン・メイソンとクロエ・ボウルズです。

目次

前書き	10
友情がいちばん大切……	13
違いは、そこから何かを学び取るためのもの……	17
けんかしなくても、ニーズは満たせる……	22
子どもたちは、難しい状況に対処できるように支援を受ける……	25
恐れず、新しい考えを試してみる……	29
子どもたちは、自分たちの社会を築き、 世界を変えるスキルを与えられている……	33
弱い者いじめがなくなって、行動を手助けしてもらえる……	36
子どもたちは尊重され、信頼され、子どもたちの考えていることは 高く評価される……	40
学習は、すべての人にとって目的のあることだ……	45
親たちも巻き込んで、尊重され、支えられる……	48
協力校一覧	52
参考連絡先	52



前書き

5 歳 から16歳のまでの間、私たちはみんな学校に行かなければなりません。これはもうそう決まっています。学校を避難場所のように感じる子もいるでしょうし、監獄だと思う子もいるでしょう。意気揚々と学校を後にする人もいれば、うまくいかなかったと思いながら去る人もいるでしょう。友人と共に笑顔で過ごした楽しい時間を思い出す人もいるでしょうし、ただ孤独であったとか、いじめられたことしか記憶にない人もいるでしょう。特別な配慮を必要とするために学校に入学できない子どもたちもいますし、配慮のせいで学校からはじき出されてしまう子どもたちもいます。学校で私たちがどのような経験をするか、それはさまざまでしょうが、おとなになった私たちの今の姿を形づくるのに、学校は大きな影響を与えているのです。

学校は、私たちが家族の外に出てはじめて出会う社会です。そこで私たちは、どのような扱いを自分が受けるのかということ、どのように他の人に対すべきかということ学びます。私たちが身につける価値感、その後の私たちの人生にずっと残るでしょう。学校で排除されたり問題視されたという経験をした人は、このようなことがすべての人に及ぼす危害を理解しています。第一に、周囲から大切にされなかった人は、自分は周囲から手ひどい扱いを受けるのだと思うようになっていきます。そして、自尊心と自信を失い、学ぶことをせず、時に怒ったり他の人を傷つけたりします。もし他の人がひどい扱いを受けているのを見かけたら、同じことをするようになってしまいます。第二に、支援が必要な人と一緒にいて、その人は支援が必要だから支援をしてもらうためにどこか別のところに行かないといけないと教わったなら、私たちはいつも互いに助け合うことはできないと覚えることになるでしょう。

インクルーシブ教育という概念は、みんなが学校に行かなければならないのなら、学校は誰でもみんな喜んで受け入れる場であるべきで、誰かを排除したりしないという考えから生まれています。もしすべての子どもたちがこのことを経験すれば、その子どもたちはおとなになってインクルーシブな社会をつくることができるでしょう。なぜなら、彼らは小さい時にどのようにすればそういうことができるかを学んでいるはずですから。

完全にインクルーシブな学校はどのようなものであるかということを説明するのは、まだ現実にそういうものが一つも存在していないために、たやすいことではありません。しかし、新しい、わくわくするような、いろいろなやり方で、別の方法を試みようとしている、幼児センターや学校や大学が、たくさんあります。このような学びの

場には、いくつか共通な点が見られます。すなわち、次のようなことです。

そのような学校では、すべての子どもたちにとって、自分たちが必要とされ、自分たちが属する地域社会の一員であると感じられることが必要であると信じています。

そのような学校では、すべての子どもたちは、考え、学ぶことができると信じています。

そのような学校では、子どもたちの弱さや障害をあげつらうのではなく、子どもたちのできることに基づいて事を進めていくことが大切だと信じています。

そのような学校では、子どもたちの行動がコントロールできない状態になった時に必要なのは、罰ではなく、支援であると信じています。

そのような学校では、違いとは、何かをそこから学ぶべきものであり、歓迎すべきものであると信じています。

そのような学校では、子どもたちを尊重します。

そのような学校では、子どもたちを励まし自信を与えます。

そのような学校では、親たちにかかわり巻き込んでいます。

そのような学校では、人を平等に扱うということは人を全く同じように扱うことだとは考えません。

そのような学校では、学校は家族や地域社会にとっての資源であると考えています。

そのような学校では、インクルージョンについての自分たちの考えを、子どもたちだけではなく、スタッフにも適用します。

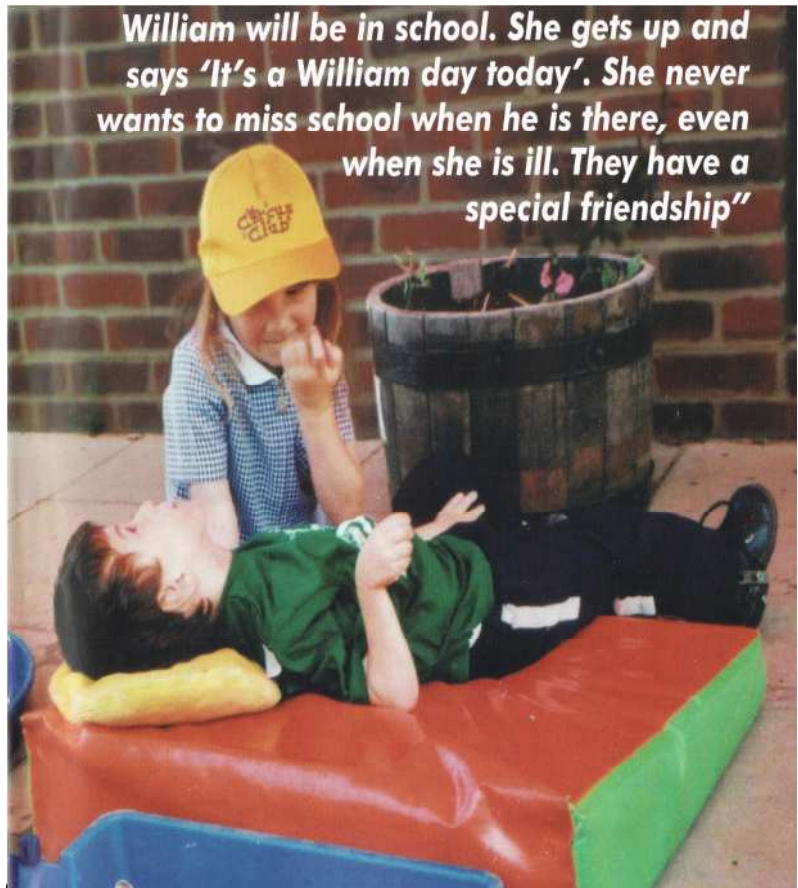
この冊子では、このような学校で行われているすばらしい実践例のいくつかを紹介しています。それらの実践例は、すべての人が所属する未来への方向を指し示す「可能性のスナップショット」なのです。





友情がいちばん大切……

ダ ビドー幼年学校は、脳性マヒで声を出してしゃべることができないウィリアムにとって、いちばんの行くべき学級です。ヴィタ、リーガン、ルーシーとナターシャは、ウィリアムの特別の友だちです。ヴィタに言わせると、ナターシャがいつもリーダーで、いちばんウィリアムの手助けをしています。ナターシャは、ウィリアムが望んでいることを読み取ることができるのです。彼女は彼の目の動きを見ます。ナターシャのママは、こう言います。「ウィリアムは、ナターシャにとって、ずっとすてきな存在なの。最初は彼のことを怖がったんだけど、今はいちばん親しい友だちの一人です。彼は危険な存在ではなく、異なるニーズを持った子どもなのだとわかったのね。それがナターシャの自己尊重と自信を増して、『ひとに与えること』ができるようになったの。ナターシャは、ウィリアムが学校に来るって知ったら、いつもより活発になるの。朝起きて、『今日はウィリアムの日だね！』って言うのよ。ウィリアムが学校に来る日は、たとえ自分が病気でも、絶対に学校を休みたくないって。二人の間には、特別の友情があるのね」



William will be in school. She gets up and says 'It's a William day today'. She never wants to miss school when he is there, even when she is ill. They have a special friendship"

「『今日はウィリアムの日だね！』ウィリアムが学校に来る日は、たとえ自分が病気でも、絶対に学校を休みたくないって、ナターシャは言うの。二人の間には、特別の友情があるのね」

子どもたちは、友だちを持つことは学校でいちばん大切なことだと、いつも言います。いわゆる「普通」の子どもたちと「普通でない」といわれる子どもたちとの間の友情は、すべての人に、人間であるということについて、私たちが皆お互いに必要としあっており、互いに与え合うことができる贈り物をみんなが持っているということについて、大切なレッスンを教えてくれます。



「遊び時間でいちばん楽しいのは、ウィリアムの車椅子を、小高くなったところに押して行って、とっても早く下りていくの——私たちみんな、それにひっ捕まって駆け下りていくのよ。手は離せない

の。だって、車椅子からウィリアムが転げ落ちてけがをしたら、大変なもの。ウィリアムが怖がっちゃいけないから、みんなでしっかり車椅子を握っているのよ。ウィリアムと一緒に本を読むのも楽しいわ。本を二冊差し出すと、ウィリアムは読みたいほうに目を向けるから、私たちは彼の目の動きを追うの。キッパーの本*が好きね。ルーシーとヴィタが本を支えて、頁をめくるの。ナターシャが言葉を読むのよ。ウィリアムは車椅子から出ると、床に寝て活動に参加するから、私たちもごろりんと一緒に寝転ぶの。ウィリアムがソフトプレイコーナーのほうに行くと、私たちもそっちに行ってごろごろ一緒にころがり回るの。ウィリアムがクラスにいて一番すてきなのは、ハグしてぎゅっと抱きしめたりすることよ」(ダビドー幼年学校の子ども)

*訳者注：わんぱく三兄弟と愛犬の出てくる、人気の絵本シリーズ。

コッテスブルック幼児学校では、運動場にフレンドシップ・ストップ（友情の停留所）を設けています。6人の子どもたちが、運動場でのバディー（相棒）であることを示す特別の帽子をかぶっています。彼らは、仲間はずれにされたりいじめられている子どもがいないか、注意して見ているのです。

運動場でのお約束：

- ◆私たちは、一緒に遊んで、お互いに気を配り合います。
- ◆私たちは、見回りのおとなに敬意を表します。
- ◆私たちは、他の遊びをしている子どもたちとうまくやっています。
- ◆私たちは、警告の合図を聞いたら、じっと立っていて、おとなしく列に並びます。
- ◆私たちは、ごみはゴミ箱に入れます。



ここは、私たちのフレンドシップ・ストップ(友情の停留所)です。

ウェストブリッジフォード小学校では、子どもたちは、自分が困っていることを話したり、問題解決の方策を見つけられるように、互いに助け合う、「仲間グループ」を作ってもらうように、頼むことができます。キャロルは、かつて友だちと何度か口げんかをしたと、次のように話してくれました。

「私たちは、以前は何日も続くような言い争いをしたのですが、今ではそんな争いは20分しか続きません。『仲間グループ』が、問題について話し合ったり、支援の方法について考えるのを、助けてくれます」

ある少年は他の子どもたちと一緒にうまくやっていくのが困難でした。「仲間グループ」にいる彼の友だちの一人が、次のように説明してくれました。

「時々君は船から海に落っこちて、そこでぷかぷか浮かんでいるような感じなんだよね。僕らは、君のライフジャケットだ。君は、ただ手を伸ばして、僕らを身につければいいだけさ」

「障害のある友だちがいるの。ドミニックっていうのよ。私たち、幼稚園が一緒だったの。ドミニックは今年私たちの学校に入ってきて、私たちとても仲良くなったのよ。時々お昼の給食を、私、彼に食べさせてあげるの。ずっと友だちでいられる人って、会えばわかるでしょ？ 私には、彼のこと、彼がどう感じているのか、わかるし、彼は、私のこと、私がどう感じているのか、わかってくれる……。ドミニックは、私が元気になるようなことをやってくれるの……。時々面白いことをするし、私が思わず笑ってしまうような顔をしてくれるのよ」(カークヒル小学校 カースティー)



友だちの輪

時々子どもたちは、友だちを作ったり、友だち関係を続けるために、支援を必要とすることがあります。誰かおとなの支援を得て、「友だちの輪」がたちあげられて、一人ぼっちで怖がっていたり、排除されるおそれのある、特定の

クラスメートについて、仲間であられるように一緒に考えようとする有志の者たちを取り込んで、かかわっていくことができるでしょう。グループの集まりを定期的に行ったり、おとなの世話人に来てもらい、見守ってもらって集会を開くこともやればよいでしょう。

ブルーコート学校で、アローシャは友だちの輪を作ってもらい、毎週集まっています。友だちの輪に加わっている男の子は、次のように話しています。「アローシャは僕らの一員で、仲間はずれにされているとは思っていません。彼女は僕らと同じような外見をした子で、僕らの友だちです」





違いは、そこから何かを学び取るためのもの……

ジュビリー 学校では、444人の児童のうちで、20人以上がろう者や聴覚障害者です。このような児童たちのインクルージョンが、学校の基礎構造の中に組み込まれています。幼稚園やホールや視聴覚センターの壁には特別に線が引いてあり、教師たちは教室で無線補助システムを使っています。学校の職員の多くがイギリス手話の第一レベル講習を修了しています。ろう者の講師が、ろうや聴覚障害の児童や親たちのために手話クラブを開いています。この手話クラブのおかげで、ろうの子どもたちは自分自身や自分たちの使う言葉に誇りを持つようになりますし、また、健聴児童が友だちに手話を使えるようになります。一人一人の児童は、口頭／聴覚（話し言葉）か、手話か、それとも両方を組み合わせるのか（トータル・コミュニケーション）、自分の望むコミュニケーション方法を選択することができます。

「子どもたちも私に教えてくれます。みんなが学習者であるという、すてきな状況です」（担任教師 ゲイル・モロイ）



「サラはダウン症です。サラがカークヒル学校に来るにあたって、私たちは大変心配していました。彼女を支援するための十分な研修を私たちは受けていないと思ったのです。私たちはダウン症についてよく知っている人に来てもらい、ダウン症についてのあらゆる知識を教えてもらいました。でも、それは間違いでした。おかげで私たちは彼女の障害にばかり注目してしまい、ますます心配になってしまいました。それがすっかり覆ったのは、ある日私たちがサラに、「いや！」ばかり言うのはやめなさいと言った時のことです。彼女は紙を一枚取って、「いや！」とそこに書き、先生に手渡しました。その時はじめて私たちは、サラのダウン症ではなく、サラ自身を見るようになったのです。彼女にはどんなことが他にできるだろうと、私たちは考えました。彼女は熱心な読書家になり、野外活動を含め、あらゆる活動に参加するようになりました。彼女には無理だろうと私たちが思った山にも登りました。他の子どもたちから『市民賞』を獲得して、今では、ここで一緒だった友だちと共に中等学校に行っています。サラのおかげで、私たちは他の障害を持つ子どもたちを、自信を持って受け入れられるようになりました」



「キャメロンは、自閉症の一種といわれる、アスペルガー症候群という、障害を持っています。彼がカークヒルに来たのは、別の学校で教師に悪態をついて、追い出されたためです。私たちは彼が悪態をつくからといって罰することはありません。コミュニケーションが彼の障害の一つであると知っているからです。他の子どもたちが彼のまねをすることはありません。インクルージョンとは、みんなに同じ扱いをするということではないと、子どもたちにはわかっているのです」

ジョージグリーンズ学校では、地域社会での人種差別がそのまま教室の中に反映されていました。白人の子どもたちは皆一緒に座り、アフロ・カリビアンの子供たちは彼らだけで、ベンガル人の子供たちはベンガルの子ばかりで、それぞれ固まって座っていました。子どもたちはお互いの名前さえ知らずにいました。そんなことでは互いに学び合うことができないと主任教師は子どもたちに話し、学校全体でそれらのグループを混ぜ合わすような座席配置を強制的に行いました。しばらく時間がかかりましたが、今では子どもたちはお互いに本当のつながりを築き、地域社会がずっと親しくなりました。私たちがどんな風に「**みんな違って、みんな平等**」であるかということがよくわかるような写真をあちこちに置いて、そのことを示しています。



ダビドー幼年学校の、ある子どもは、友だちのやっていることをまねして、教室で楽しめるのは一つだけではないということを学びました！

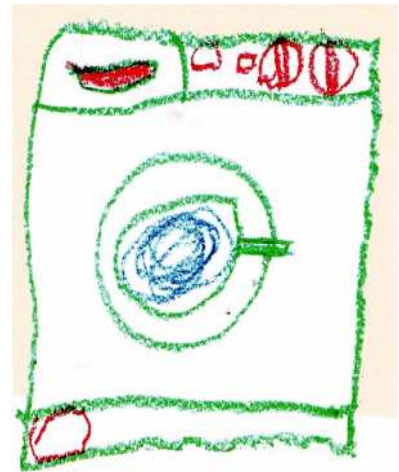
「カーラは、私立学校で排除され、カークヒルに来ました。彼女は一日30回以上てんかんの発作を起こしていました。私たちは彼女を歓迎しました。すると、ちょうど5週間たった頃から、彼女は、目に入るものすべてを口に入れてしまう、見た目にも非常に厳しい自閉症の子どもから、私たちの学校社会の陽気なメンバーに変わったのです」

「ダビドー幼年学校には、ダウン症の児童が二人います。そこで、私たちは、彼らが、地域で『インクルーシブな』生活を送っているダウン症のおとなに会えば、自分たちが成長した暁にどんなことができるようになるか、学べてよいだろうと思いつきました。ところが、学習に困難があったおとなは、ほとんどの人が私たちのところのような普通の学校に来る機会がありませんでした。私たちは、24歳で、学習に困難のあるおとなのためのデイセンターに来ている、マリアという女性を見つけました。私たちは、マリアに、火曜日の午前中学校に来て一緒に働いてくれないかと頼みました。マリアは、ここにやってきた当初は、コーヒーマグを入れることもできませんでした。自信がなく、自分で自分のことをやる経験もなかったからです。今では彼女は自信にあふれ、私たち職員の一員となっています。私たちはマリアがダンスのグループに入っていることを知り、そのグループの人たちに学校に来て子どもたちのためにダンスの披露をしてくれるように頼みました。子どもたちは釘付けになりましたよ」

「嚢胞性繊維症であるためにいじめられて、他の学校からタープズグリーン小学校に転校してきた子どもがいました。彼女は、主任教師である私に、みんなに自分のことを話してほしいと頼んできました。障害を持っていることを他の子どもたちに伝えてくれと頼んだのです。私たちは一緒にがんばろうと決めて、彼女は集会でみんなに話をしました。すると、私たちの学校では、誰かが彼女をいじめるといった問題は、一度も起こりませんでした」

ハンプステッド学校では、子どもたちのさまざまに異なる能力を貴重な教育資源として利用しています。ここでは、ほとんどの科目で能力別のグループに分けていません。そういう風に分けようとする、たとえば特別に教師を配置したり、より小さなグループに分けたりしても、多くの子どもたちの成果がむしろ小さくなることに気づいたのです。一緒に教えると、子どもたちどうして、自分のほうが誰かよりよくできるとかできないと思うよりも、むしろ互いに助け合うのです。学習を行う場として、より安全な雰囲気が生み出され、どのレベルの子どもたちの経験も制限することがありません。

「ハーベイは、4歳の時はじめてカークヒル学校にやってきました。彼は、『おはようございます。僕の名前はハーベイです。洗濯機が好きです』と言いました。そして、洗濯機について、40もの質問をしました。私たちが彼に自分の絵を描いてと言うと、彼は……洗濯機の絵を描いたのです！ ハーベイは、私たちに自閉症がどんなものなのかを教えてくださいました」



ローランドヒルでは、多様性は強みと考えられています。

歩き回っています。彼の顔がドアのところにふっと現れるんですが、大概そんなところにいるはずない、というようなところに現れるんですよ！」

「トムは、私たちローランドヒル幼児センターのよちよちさんオポチュニティーグループからスタートしました。はい回ることはできず、彼のママは彼がグループの中でどうやっていけるか、不安を抱いていました。私たちは、彼が外の庭ではい回っている間に、彼がどんな服を着たらいいのかと考えました。2、3週間の間彼はあちこちはい回り、他の子どもたちも一緒に彼の周りをはい回りました。彼は遊戯装置の上ではい回り、他の子どもたちも彼のまねをしました。トムがはい回らなければ、他の子どもたちはそんなことしようなんて考えもしなかったでしょう。今トムは気取ってあちこち



「嵐の中の子どもたち」は、ハンプステッド学校に設けられたチャリティー事業です。この学校では難民の子どもたちを多く受け入れています。その子たちは、語るべき驚くような物語を持っているのです。

「私たちが人々について抱く思い込みには、間違っていることが非常に多くあって、ボスニアや、ソマリアといったところからやってきた生徒たちに対しても誤解があります。彼らは皆語るべき物語を持っており、彼らは皆大切な資源であるのです」



けんかしなくても、ニーズは満たせる……

3つの小学校が統合されて、キングスアベニューという、1つの新しいインクルーシブな学校が生まれました。3つのうち1つの小学校は、弱視や目の不自由な子どもたちのための特別学校でした。子どもたちのインクルージョンを支えるために、新しい学校へ移る児童と共に、特別学校の教職員の何人かが新しい学校に転勤してきました。新しい学校が建設される時には、身体障害を持つ子どもたちに便利にすると同時に、学校が明るくはっきりと見えるようにするためにさまざまな工夫がなされました。黄色いガイドラインがすべての廊下に引かれていて、視覚障害を持つ子どもたちが自分の進む道を見つけやすいように助けてくれます。すべての子どもたちが普通クラスと一緒に授業を受けています。勉強は、大きなプリントや、必要なら点字を用いて行います。ある特別のプロジェクトでは、視覚障害を持つ子どもたちは、自分たちがどのようにものを見ているか、写真を撮るよう勧められました。それらはその後、見るだけでなくさわって感じられるようにエンボス加工され、すべての生徒にとって身近なものになりました。



黄色いガイドラインがすべての廊下に引かれています。

ターブズグリーン小学校では、障害を持つ親が、校長に、「もうすぐ私は娘の授業を見に行くことができなくなってしまうでしょう。というのは、教室が階上にあり、自分の車椅子を乗せて上られるエレベーターがないからです」と話しました。このことで校長と理事はアクセスの問題に気がつき、地方教育委員会が教室を増設するための資金を提供してきた時に、教室はこれ以上いらないから、今ある教室によりよくアクセスできるようにしたいと言いました。アクセスがよくなるように何か手を打たないと、学校は、障害を持つ子どもや、訪問客や、教職員や、両親を受け入れないことになる、それはおかしいと思うと言ったのです。そこで、エレベーターをつけて、スロープや、車椅子の入るトイレや、日常生活の介護を行う部屋や、リラックスできる部屋や、理学療法の部屋を設置するために、そのお金を使いました。コンピューター実習室を作る代わりに、この学校では、どの授業にも持って行けるラップトップのパソコンを16台買ったのです。

「いちばんできない人のために備えようと立ち止まれば、それはすべての人の役に立ちます」(ターブズグリーン小学校 校長)

ジョージグリーンズ学校では、毎朝8時から、無料の朝食を、必要とする教職員や子どもたちに提供しています。

ローランドヒル幼児センターでは、高レベルの支援が必要な子どもたちもすべてインクルージョンされて一緒にいます。経管栄養が必要な子どもたちもいて、職員は経管栄養の操作ができるように教育されています。言語聴覚士がセンターにいつもやってきて、別室で一緒に作業するために何人かの子どもを連れ出そうとしましたが、子どもたちは行きたがりませんでした。今や子どもたちは、友だちと一緒にいます。理学療法を含めて、子どもたちが必要とするであろう特別の支援は、毎日の学習や遊び活動の一部とされています。



ダビドー幼年学校に車椅子を使う子どもが来ることになりました。彼の入る学年グループは階上で授業を受けていましたが、エレベーターがまだ学校には設置されていませんでした。特別支援コーディネーターは、その子どもが一階で授業を受けられるように、すべての教師に今使っている教室をみんな取り替えてくださいと頼むのをためらっていました。しかし彼女が頼むより先に、インクルージョンでウィリアムを受け入れるためには、学校をひっくり返す価値があると決めたと、教師たちのほうから彼女に言ったのです。



カークヒル学校で、ケネットは、彼女を支援してくれる拡大キーボードとコミュニケーションボードを持っています。

イルド)

クリーブズ小学校では、著しく学習が困難な子どもたちを受け入れています。この学校には4つのウイングがあります。教師と児童は当番表にしたがって、教材の置いてある場所を回っていきます。教師はチームを組んで、計画を作成し授業を行うので、いつも支援が確保されています。

「大きなバランスボールの上でぽんぽん飛び跳ねている子どもに数学を教えているところが、他のどこにあるでしょう。だって、こうしないと彼は部屋の中にじっとしていることができないのですから」(教師 カトリーナ・ワ

タックスウッド初等学校では、古い戸棚が、そんなことが必要な子どもたちにとっての静かな「感覚刺激」の部屋になっています。



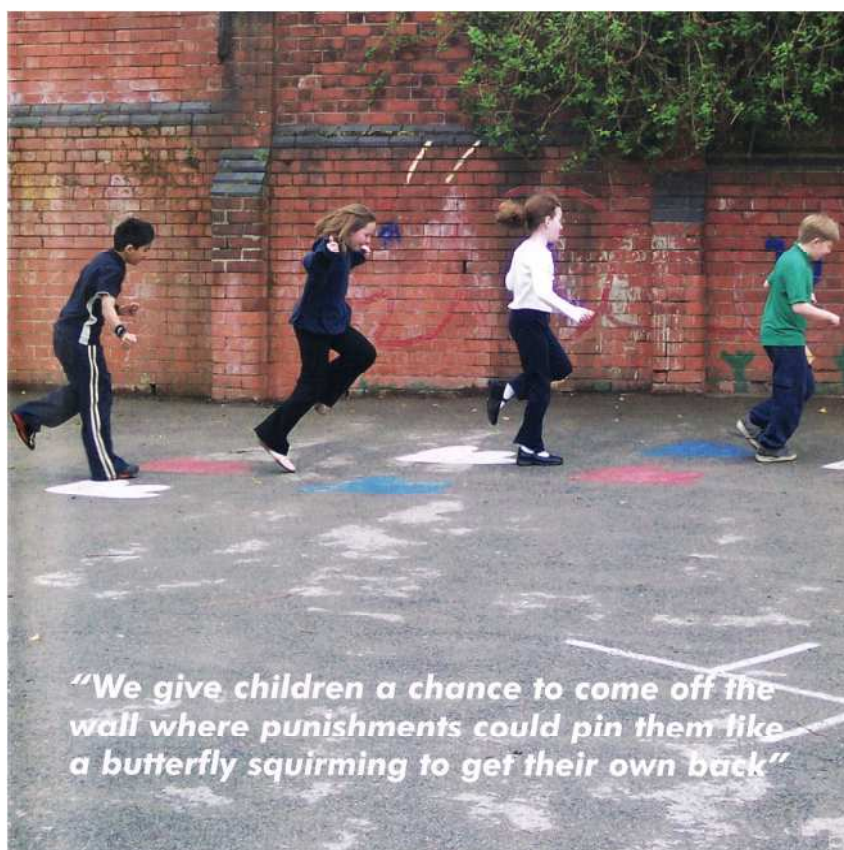
「ある男の子は、ほとんどここに住んでいましたよ。爆発しそうになると、おとなと一緒にここに来て、落ち着いていったのです」(校長 スー・イーグル)



子どもたちは、難しい状況に対処できるように支援を受ける……

ウェストブリッジフォード小学校では、子どもたちは、自分の行ったことに対して罰せられる代わりに、自分の感情を見つめて、理解し、自分で自分の感情の面倒を見るように支援を受けます。校長は次のように語っています。「子どもたちが懲罰で蝶のようにピン止めされて、仕返ししてやろうとばたばた騒いでいるような壁から、外れられるようなチャンスを、私たちは子どもたちに与えているのです」

ジョシュは次のように言っています。「以前は僕、あまり行儀よくなかったんだ。最初ここに来た時には、あまりこの学校のこと、好きじゃなかったんだけど。先生たちにたくさん助けてもらった。ここの先生たち、僕に向かって怒鳴らない。先生たちはこう聞くんた。『大丈夫かい？』『何か問題があるの？』『あなたは思う？』って。今では何か問題があったら、先生たちにそのことを言えるよ。だって、先生たちを信頼しているからね」



"We give children a chance to come off the wall where punishments could pin them like a butterfly squirming to get their own back"

「子どもたちが懲罰で蝶のようにピン止めされて、仕返ししてやろうとばたばた騒いでいるような壁から、外れられるようなチャンスを、私たちは子どもたちに与えているのです」

ハンプステッド学校には、子どもたちの情緒面と行動面の支援を一体となって行うようなチームがあります。チームは、カウンセラー、ユースワーカー、ソーシャルワーカー、看護師の各々1名と、11年級（訳者注：最終学年）についてはコネクションワーカー1名が加わって、構成されています。学習助言者の長であるグレンが、チームの運営を行います。チームのメンバーは、情報を教えてもらい一緒に問題に取り組むために、他の主要スタッフと昼食時に顔を合わせます。このチームの支援を得る子どもたちは、他の学校から排除されてしまった子どもたちであったりします。そんな子どもたちがカウンセリングや集中的な学習支援を受けるためにプライバシーが必要となる時に使えるよう、学校は建物の中にいくつかの部屋を指定して、「ハウス」と呼んでいます。子どもたちは、自分で自分の目標を定めます。その中には、絵画や装飾、自動車整備、左官工事、れんが積み工事といった、カレッジの臨時講座への参加も含まれています。

「ジョージグリーンズ学校で、私たちは、期間を定めて子どもたちを家に帰して排除するということをやめようと決断しました。子どもたちはいったん学校から出てしまえば、彼らを監督したり支援したりするようなおとなが誰もいない危険な環境や困難な状況の中に一人置き去りにされるのだということにはっきり気づいたのです。その代わり、私たちは監督付きの『謹慎



グレンと、「ハウス」の生徒たち

ルーム』を設けました。子どもたちは他の友だちよりも遅くここにやって来て、遅く帰ります。休憩時間も外に出ず、部屋の中で食事をします。彼らにはやるべき作業が与えられます。当然のことながら、彼らはこれを嫌がり、結果として、停学処分の件数は劇的に減少しました。4年あまりの間、私たちは退学処分を出さずにすんでいます」

「私がスーに会うようになったのは、私が8年級でクラスが変わって友だちと話さなくなってからです。私はある授業から追い出されたんです。——すると、スーは、いつ私が許されて授業に戻れるのかを担当の先生に聞いて確かめてくれました。——そのクラスはレベルが高いので、スーは私が教科学習をするのを手助けしてくれました。——スペイン語をする代わりに、私はここに来ていたのよ。スーは、私にもっと勉強

をする時間をとるようにと言って、その後で私が勉強をするのを助けてくれたわ。そして、秘密にしておきたいような問題が起きても助けてくれた。——先生はそんなことって、聞きたがらないんだけどね。自分たちの問題をみんなで話してお互いに助言し合えるように、同じ年の女の子たちのグループを作ってくれたの。あなたもスーに会って話したいと思うんなら、会って話せるような時間をいつでも彼女は作ってくれるわよ」(カレン)

「僕が9年級の時、お父さんとの間に問題があったんだ——いつも僕は壁を殴ってた——いいことないよ、指の関節が壊れるんだ。生物の先生との間にトラブルがあった——僕はここに来て、グレンが僕を元に戻れるよう助けてくれた——僕はここに来て、グレンにいろんな問題や学校について話すことができた——結局僕は生物(A)の授業を最高点をもらって終了することができた——僕は自分でそれができたんだ。先生なんて必要じゃなかった。誰か話すことができる人がいたってこと。だって、家にはママと僕しかいなかったんだもの」(ジョセフ)

「8年級の時に、ここにアンガーマネジメント(=怒りを他人にぶつけないように処理すること)のために来ました。僕は本当にすぐにカッとなって、ガラスにこぶしをぶついたりしていたから。グレンは僕に、けんかせずにどうやって状況を切り抜けるかということについて助言してくれました。家の中での問題について、僕を支援し助言をくれました。僕は急にカッとなって怒り出したりしてました。——今ではどうやって我慢するか学びました。グレンは、授業で僕のやってしまう綴り間違いを手伝って直してくれました。僕に自信を与えてくれました。新しい友だちや、おとなとかもっと他の人たちとのつながりを、僕に与えてくれました。前よりできることが僕にはたくさんあると気づきました」(スティーブン)

「8年級の時に、アンガーマネジメントの支援を受けるためにここに来ました。私は男の子たちに対して暴力的だったのです。スーとグレンが私を指導してくれて、私はうまくいきました。スーは私の授業課題の締め切りに間に合うよう助けてくれました。そして、家族の問題や学校の中や外での問題について、私に話してくれました。私が助けてほしい時、スーは決して背を向けることはありません。もともと怒りを感じた時に私は来るだけだったんですが、私にはもっといろんなことに対しての支援が必要だと私たちは気づいたんです。今では成績がみんなよくなってきたし、もう私は暴力的ではありません」(ジョアン)

「別の学校でトイレを壊して、7年級で退学になって、その後9年級でここに来たんだ。まる1年間は家で家庭教師についてた。グレンがうまくなじめるよう手助けしてくれた。この学校はずいぶん違う。制服を着なくてもいいし。この学校はみんなそれぞれに違うという考え方が好きなんだ。違う文化の人たちがたくさんいて、けんか

はそんなじゃないし、暴力的ではないし、あちこちに先生がいるし。——先生の数のことじゃないよ。——この学校は、丸ごと1つの学校——もし誰かがいじめられたら、学年全体が気を配って、支える。——傍観して笑っているんじゃないで、何が起きているんだと聞いてきてくれる」(ピーター)

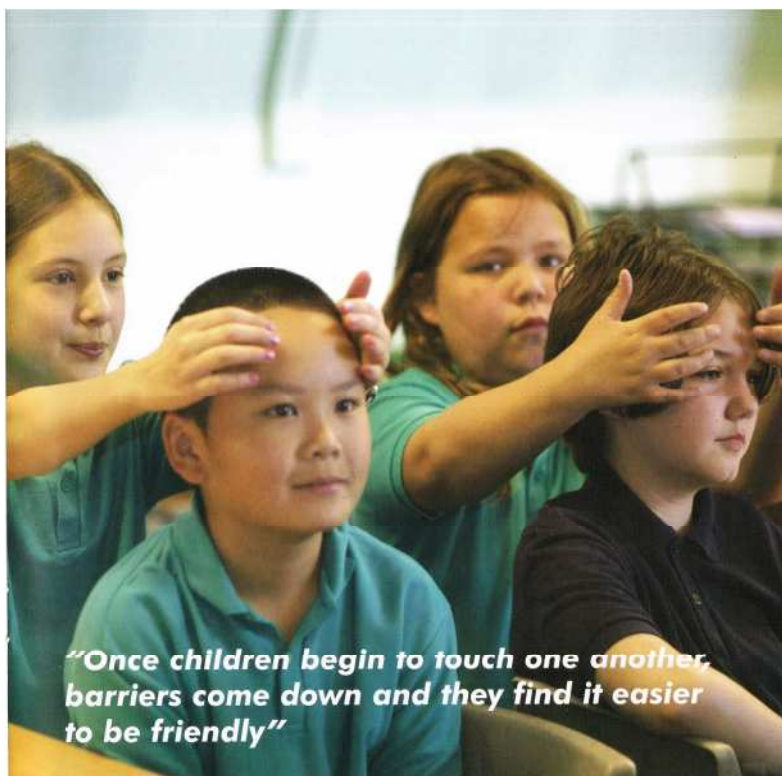
ジョージグリーンズ学校で、父親が自殺したある女の子は、毎日学校に来るのだけど、授業には出ませんでした。彼女は図書室に行って、一年間ずっと泣いていたのです。学校は彼女のために死別カウンセリングが受けられるように手配して、彼女が自分の行動計画を立てられるよう支援しました。彼女はしっかりそのプログラムにのって、必要とする支援を何でも求めてきました。そして、次第に悲しみに沈む人から幸せな人へと変わっていき、再び学習ができるようになったのです。



恐れず、新しい考えを試してみる……

手で触れることによって心を安らがせる力が生まれることが、学校における国際マッサージプログラム（M I S P）に参加しているガーデン小学校では認められています。毎日子どもたちは2人一組になって、お互いに10分ずつ、頭、首、肩と背中に、簡単なマッサージを行います。子どもたちは、マッサージをしていいですかと聞いてからマッサージを行い、力の加え方はこれでいいですかと確認します。マッサージに参加するかどうかは子どもたちが選択しますが、このように選択することは通常学校では行われていないことです。この選択ということが子どもたちに力を与え、生活の別の場面でも自信をつけてくれます。

「最初試験的なプログラムとしてマッサージを取り入れた時、私はその結果が信じられませんでした。学期の中休み*が終わった時、マッサージを行っていたクラスが突然変わったのです。子どもたちは以前よりとても落ち着いて、お互いの気持ちがわかるようになったのです。いじめや攻撃がはっきりと減りました。お昼休みにどっと私のところに送られてくる子どもたち**の姿がなくなり、1人の子どもも来なくなりました。でも、マッサージを受けていない、隣のクラスでは、何も変化はありませんでした。子どもたちもそのことに気づき、そして、効果はどんどん大きくなっていきました」（校長 ヴィヴ・トゥームス）



「子どもたちが互いに触れ合うことを始めると、垣根が低くなって、和やかに打ち解けやすくなるのです」

*訳者注：英国では学期の中間に、1週間の休みがある。

****訳者注：**叱られたり謝罪の言葉を言うために校長室に送られてくる子どもたちのことを言っていると思われる。

タックスウッド初等学校では、自尊心がまったく持てず危険な行動をとる18人の少年が、哲学と、芸術と、演劇の短期集中コースを受けました。

「私たちは、彼らにあまりに多くの学力を教え込もうとするのはやめて、自分が人としてどんな人間であるのかということと、自分の持っている価値観について、集中するようにしたんです。私たち自身が情緒的にたくましくなって、生徒たちに対して情緒的な安全性を与えようと思いました。それは、川の中にいる誰かを助けようとして、しっかりと自分の足を土手に保っておく必要があるというような感じです。——川の中に自分も一緒になって沈んでしまうようでは、彼らを助けることはできないのです」

リスター地域学校は、地域社会の中心となることをめざしています。学校には目の不自由な生徒のための資源を備えていて、イギリス手話を使った授業を受けることができます。エクステンデッド・サービスをすべて備えた学校になっていて、家族支援員も雇っています。何でも備えた「ドロップ・イン・センター（立ち寄ってくつろいだり相談できる公共の施設）」を展開して、地域の親グループとつながりを持っています。

ハンプステッド学校では、ある少年が、最悪の家庭環境に置かれていました。

「彼を支援するために、私たちは彼を体育の教員補助にして給料を支払いました。1学期だけのことでしたが、かなり状況が変わりました」

クレイグが病院にいた時、タックスウッド学校の先生が毎日彼を見舞いに行って、弁当を食べさせました。彼が食べようとしたのはそれだけでした。というのは、それは学校が出してくれるものだったからです。

自閉症の児童がダビドー幼年学校に転校してきて、最初は本当に大変なことでした。ある日、彼は、学校の中の遊び場で錯乱状態になりました。——私はなぜそうなったか全然わからなかったのですが、ふと自閉症の子どもたちがどんな風に神経を高ぶらせてしまうかという説明を講座で聞いたことを思い出しました。——いろんな音がどんどん大きくなって、ぎらぎら光がまぶしく輝いてきたら、彼らにとっては、もうそれでいっぱいいっぱいになってしまうのですね。ちょっと下がって考えてみました。「では、今日外でバーナビーの気持ちをこんなにかき乱してしまったのは、いつもと何がどう違っているのだろう？」私は、今日遊び場に新しい自転車がはじめて出されてきて、それで子どもたちがうれしくて大騒ぎしていることに気がつきました。——多分この叫び声でバーナビーは気持ちをかき乱されてしまったのでしょう。彼はよく

錯乱状態になって、地面に身体をぶついたりしました。——どうしてこうなるのだろう、とまた私は考えました。そして、もし大きな箱があってその中に入ることができれば、彼は安心できるだろうと思ったのです。ただそれはあまり現実的ではなかったので、私たちは彼に毛布を1枚渡しました。彼は毛布にくるまって、それで気持ちを静めました。毛布の中に入れば彼は安心できるようでした。他の子どもたちも、彼がそんな風にカームダウンを必要とするような時には気づいて、『バーナビーの毛布を取って』と言うようになりました。そのうち、バーナビーはもう毛布を必要としなくなりました」(特別支援コーディネーター)

ジョージグリーンズ学校では、地域の芸術家が、退学させられそうになっている5人の子どもたちを支援して、食堂の壁にデザインをして絵を描かせました。休憩時間やお昼休みに彼らは食堂にはしごを立てて絵を描き、その様子を他のみんなは見て、どれだけ一生懸命に彼らが働いているかを知り、彼らがなしたげたことに対して尊敬の気持ちを抱くことになりました。



退学させられそうになった5人の子どもたちが、壁にデザインして、絵を描いた。

ローランドヒルの教師たちは、こう語っています。

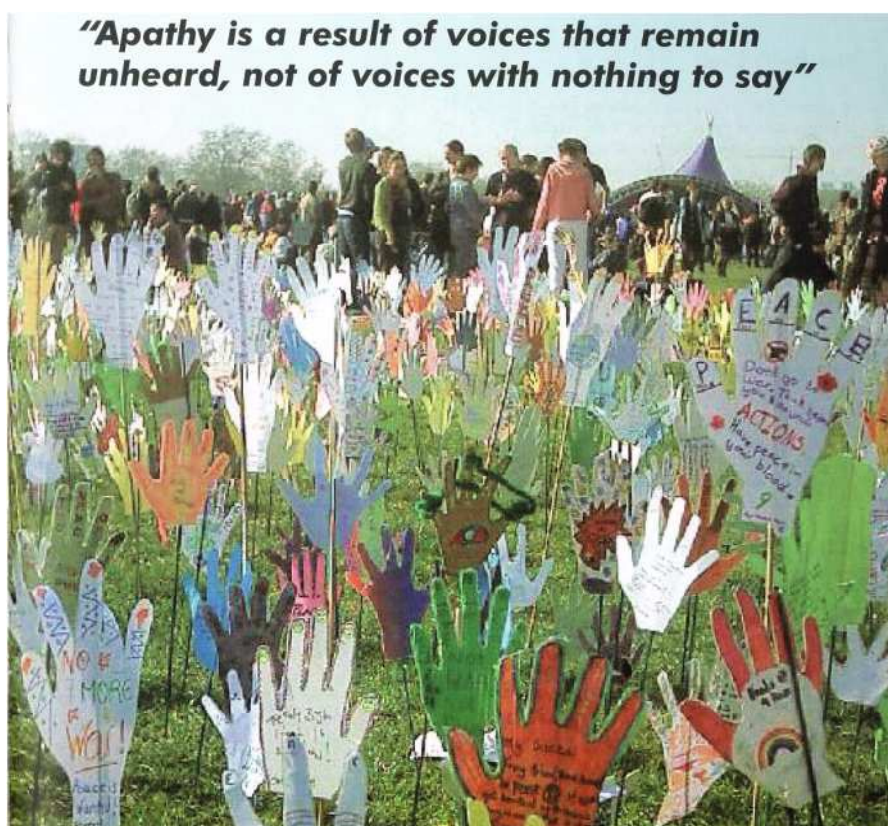
「ここで仕事をするのは、本当に面白くて刺激的です。スタッフは多くの経験を積んでいて、とても協力的なチームです。もし私がどうしていいかわからなくなったら、誰かに聞きます」「働く場としては、常に求められるところが多く、魅力的なところでは、というのは、すべてのことを子どもたちのいるところに基礎を置いて作っていくのですから。子どもたちの姿を見て、彼らが何に興味を持っているかを感じ取り、その周りに活動と学習を組み立てていくのです」



子どもたちは、自分たちの社会を築き、世界を変えるスキルを与えられている……

ハンプステッド学校では、子どもたちに、イラク戦争について抱いている不安を明らかにするように奨励しました。すると子どもたちは、「平和のために手をあげよう」というプロジェクトを考え出し、イギリス全土の子どもたちに、くるっと自分の手の絵を

描いて、その中に戦争と平和についての自分の考えを書き込むようにと呼びかけました。何千もの「手」が送られてきました。そこで、それらの絵を棒に貼って、自分たちの政府が自分たちの名のもとに行っていることに対して、子どもたちがどんな風を感じているのかを示すための大規模な集会が開催された日に、ハイドパークに「植え」られました。このプロジェクトは、今では継続キャンペーンとなり、子どもた



「無関心は、耳を傾けられることもなく捨て置かれた多くの声の結果であり、何も言うことはないという多くの声の結果ではないのです」

ちが興味を感じるあらゆるテーマをカバーしています。この運営はすべて子どもたちが行い、政治的参画と民主主義、そして社会全体での討論を奨励しています。また、代替的公民権運動の授業を小学校に提供して、政治意識を引き上げ無関心を食い止めようとしています。

「まとめ役」

ジョージグリーンズ学校では、異なる階級や少数民族グループの間に良好な関係を促進する多くの変化が学校の中では見られるにもかかわらず、一歩外に出ると、対立や潜在的な暴力が相変わらず起こっているということがわかりました。



これをやめさせるために、学校は不良グループのリーダーである若者を10人見つけ出しました。

そして、彼らを北アイルランドのベルファストへ連れて行き、長年にわたるカトリックとプロテスタントの地域社会間の対立の結果を、彼らの目に直接見せました。そしてその場で、彼らに紛争解決のスキルを教えました。学校に戻ると、このことで何か違いが生まれるのではないかと、スタッフはワクワクしながら見ていました。

休憩時間に子どもたちはいつものように自分たちのリーダーを探しに出て行き、リーダーの指示を待っていました。この日彼らが見たのは、リーダーたちが互いの体に腕を回して輪になっている姿でした。リーダーたちはそうやって3分間無言で立っていて、互いに称賛し合ってから、静かに離れました。「これは平和の輪だ」とリーダーたちは言いました。

彼らは自分たちを「まとめ役」へと変化させ、そして今では年下の子どもたちにそんなスキルを教えています。北イングランドへの旅は、もっと人数の多いグループで、毎年繰り返し行われています。学校の文化が変わったのです。

「暴力は決して解決につながらないことを私たちは学びました。暴力は、傷つきや破壊をもたらすだけです」(ベン、ウォン、ジャスミナ)

生徒会



生徒会選挙の終了を祝うタックスウッド学校
の子どもたち

ウェストブリッグフォード小学校の生徒会に、休憩時間にサッカーのボールにぶつかったという子どもたちからの苦情が多く寄せられてきました。そこで、生徒会の会合でサッカーの問題について話し合い、投票をすることに決めたところ、過半数がサッカー禁止に票を投じました。生徒会のリーダーたちはサッカーのチームに入っていて、この決定に自分が加わるのは大変辛いと感じました。あるリーダーは次のように言っています。

「あれはひどかった。だって、僕はいつだってサッカーをやりたいんだから。でも、その決定が多くの人にとってよいことで僕だけのためじゃないというのなら、それは認めないといけないよね」

ハムザは、現在のリーダーの一人であるエイミーによって、来年の生徒会のリーダーになるよう、たった今選ばれました。学校でこれまで問題を起こしたことがないから自分が選ばれたとハムザは思っていますが、友人たちは彼が選ばれたのは次のような理由だと思っています。

「エイミーは、ハムザが、物事をよく見て、よく話を聞いて、意見を出すことがとてもよくできると思ってるんだ」

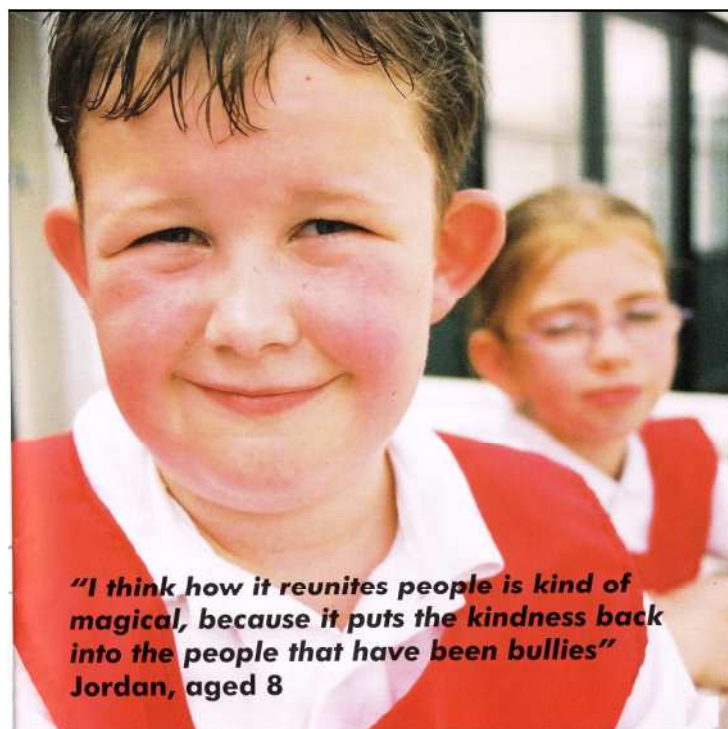
「自分が必要とされていると感じるのは、すてきなことです。時々ベッドでのんびりしていたいと思う時もあるけど、でも、そんな時には次のように考えるんだ」と、ハムザは言います。「みんなが学校で僕を必要としているんだ」と。





弱い者いじめがなくなって、行動を手助けしてもらえる……

★ スターにあるヒーザーブルック小学校は、子どもたちの間のいじめの問題を子どもたちが自分たち自身で解決できるよう勇気づけようと決めました。外部からファシリテーターを呼んで、子どもたち20人に仲間どうしによる仲裁の訓練をさせました。20人の子どもたちの中にはいじめっ子やいじめの対象であった被害者もいました。彼らはこのコースに参加申し込みをした後に、面接を受けて選ばれたのです。その過程はすべて、BBCの「ひとつの命」シリーズの中の「弱い者いじめを打ち砕け」という番組のために撮影されました。仲裁者の1人、8歳のジョーダン様は次のように言いました。「どういう風に人を仲直りさせられるかっていうと、それはちょっと魔法みたいだ。だって、いじめっ子だった子どもたちにやさしさを取り戻させてしまうんだから」



「どういう風に人を仲直りさせられるかっていうと、それはちょっと魔法みたいだ。だって、いじめっ子だった子どもたちにやさしさを取り戻させてしまうんだから」(ジョーダン 8歳)

ピアサポート

ピアサポートは、やりたいと名乗り出た子どもたちに、傾聴やコミュニケーション、問題解決や対立への対処法等のスキルの訓練を与えて行います。ピアサポートによって、子どもたちがおとなの監督する下で、学校に拠点を置いたプロジェクトを通して、自分たちの手で自分たちのために支援し合うことができるのです。この訓練は通常学校外の人を入れて行われます。



サザック小学校の子どもたち

ノッティンガム市のいじめ対策サポートチームは、多くの学校と協働してこのようなプログラムを開発しています。サザック小学校では、子どもたちは、学校で年下の子どもたちにどのように仲間としてかわり支えるか、サポートチームから訓練を受けています。

ウェストブリッグフォード小学校では、子どもたちが「問題を解決できる人」としての訓練を受けています。ブライオニ・アンはこう説明します。

「もし2人の子が仲たがいして、でも、先生には言いたくないと思ったら、私のところに来ることができます。そうすると私は、『あなたたち2人の間に一体何が起こったの?』とその子たちに聞きます。その子たち両方の話を聞いて、その子たちがどんな風に感じているのか、そして、どうしたら2人の間がうまくいくだろうかと尋ねるのです」

ビッグウッド学校では、15人の子どもたちに訓練をしてピアカウンセラーにしました。もし誰か子どもが何か話したいことがあれば、予約をお願いする伝票に記入して、学校のあちこちに置いてある箱の中に入れます。そうすると、ピアカウンセラーの子どもが休憩時間や昼食時、あるいは放課後に、内々でその子に会うのです。

「私は何ヶ月かいじめられていたんだけど、おとなに話すより同じ年の子に話したほうがうんと話しやすい気がしたの。ピアカウンセラーたちはそばにいてすてきな人たちで、いじめはなくなったの」(ビッグウッド学校 9歳の女の子)

修復的正義

ノッティンガム市の地方教育委員会では、関係が非常に悪くなった時に、被害者と害を与えた者の双方を支援してお互いのことをわかり合い、必要なら謝罪を行って、お互いにこれまでとは違う行動をすると同意することができるよう、修復的正義の手法が用いられています。訓練を受けたファシリテーターが当事者のうち1人に次々と質問を投げかけていき、それをもう1人が聞くようにします。2人が同意の書面に署名をして、この過程は終了とされます。



ビッグウッド学校のピアカウンセラーたち

「この同意するということが重要でした。同意の中で、彼は悪口をやめると言って、実際にそうしました。私の両親は、彼の両親に話をするのが好きでした。私はずっと学校に行っていますし、満足しています。今ここから引っ越したいとは思いません」
(ノッティンガム中等学校 9年級の女の子)

「問題が整理されます。僕は自分がどれほど彼を苦しめたか気づかなかった。彼が話しているのを聞くのは嫌な気分だった。いろいろよく考えてみて、その結果についても考えた。みんな、停学や退学を処罰とは思わない。それは単に学校を休むだけ。もし僕が停学とか退学にされていたなら、自分が何をしたのかということを僕は考えなかっただろうね。顔を見て話すのは辛かったけれど、そのおかげで問題が解決できた」
(ノッティンガム中等学校 9年級の男の子)

カークヒル小学校の生徒会は、責任を持っていじめに取り組もうと決めました。

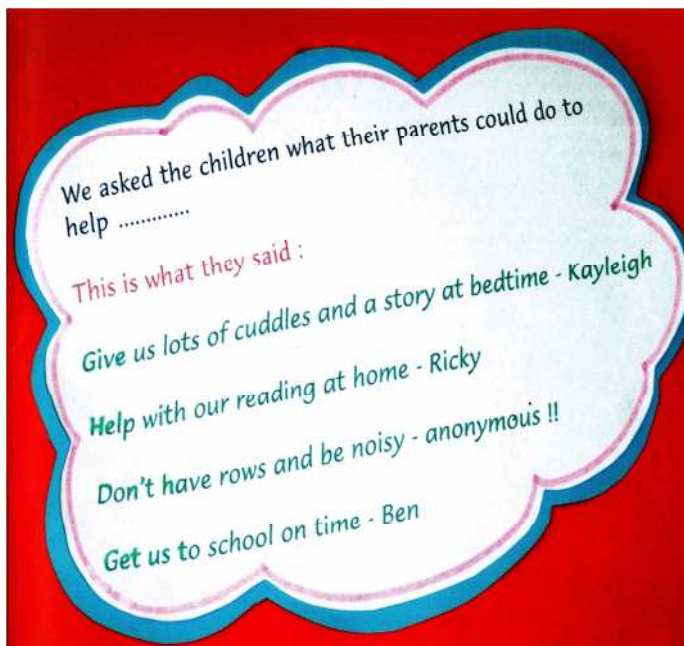
「私たちは、もしいじめられているのが自分であつたらこんな風に取り扱ってほしいと思うようなやり方で、いじめの状況に対処します。子どもたちに個別に原因は何かと聞いて、いじめの原因と、どのようにしていじめが起こったかということを調べます。いじめられた子どもたちには、もしそんなことがまた起こったら、私たちのとこ

ろに来るようにと言います。私たちは親たちのために市民の夕べという集まりを開催しました。というのは、適切な行動をおとなが取ってくれないことがあるからです。おとなは、ただいじめられた人の話を聞くだけだったりします。しかし、いじめは、いじめる側が以前に何かされたことに対する怒りであったり、何かの理由で彼らを取り乱していたために起こることもあるのです」



子どもたちは尊重され、信頼され、 子どもたちの考えていることは高く評価される……

タックスウッドコミュニティー初等学校の校長は、すべての子どもたちは自分たち自身のことを考える力を持っていると強く信じています。この学校では、5歳の子どものために哲学の授業を行い、授業の中で「私たちはどうして死ぬのか？」というような大きな問題を問いかけています。子どもたちの考えたことは記録に残し、大切にされます。子どもたちは、すべての問いに一つの正しい答えがあるわけではないこと、すべての人の見方が大切だということを学びます。子どもたちは互いの考えに対して意見を言うよう促されます。子どもたちは自分たちの実生活に関連する興味深いテーマの「専門家」となるために、ドラマを使います。教師や子どもたちは皆研究者とみなされます。学校は「探究のコミュニティー」と呼ばれています。



子どもたちに両親にどんなことで助けてもらえるか聞いてみたところ……
子どもたちは次のように答えました。

- ・ 何度もぎゅっと抱きしめて、寝る前に物語を読んでもくれること（ケイリー）
- ・ 家で「本読み」の宿題を手伝ってくれること（リッキー）
- ・ けんかしてうるさくしないでほしい（匿名!!）
- ・ 時間に間に合うように学校に連れていってくれること（ベン）



エリスギルフォード中等学校では、子どもたちのグループが自発的に志願して、高レベルの支援を必要とする子どもを援助してその子の将来を計画しようとしていました。その子どもはこの時に障害を持つおとなに支援に入ってもらうことを要請し、学校はそうのようにとりはからうと同意しました。みんなは一緒にその子どもの過去の経験や知力、能力、将来に対する希望と不安を調べるための一連の質問に答えました。そしてそれから、彼女の夢をかなえる手助けをするための次のステップを考えて、彼女の夢がかなうようにどういう風に支援できるかということ話をしました。それらはすべて「彼女のために行うべき行動計画」と名づけた一つの大きな絵に描き込まれました。このすべての過程が、MAP (Making Action Plans=行動計画を作る) と呼ばれます。それは、誰かのために迷った時に道を見つけられるように地図を作るようなものなのです。グループのうちの何人かは、彼女が学校を出るまでずっと一緒に遊び仲間になりました。

ターブズグリーン小学校では、行動規範を書面にして作っていて、その中で教職員は子どもたちに向かって大声を出してはいけないことになっています。これは子どもたちを嘲りや恐怖から守ることを目的としています。この学校では対立ではなく話し合うことを信じているのです。



エリオット普通科学校で、身体障害を持つ12歳の子どもが、身の回りの世話とノートテイクをしてくれるマンツーマンの介助員を必要としていました。学校では、いくつか思い違いもあった後で、この子どもが補助を行う人を自分で選び、心と身体に密着した、個人的で、毎日変化するような彼女のニーズを満たしてくれるよう、訓練すべきだと認めました。学校は彼女に、仕事の詳細な内容とこんな人が欲しいということを書き出すように勧め、それを地元の新聞に出す求人広告のもとにして用いました。そして、彼女は、母親と学校の教職員2人と共に、応募者を書面で選んだり面接を行う手助けをしました。教職員も母親も当事者である子どもも、全員がこの人がいいと一致して、その人が補助に入ることになりました。子どもも介助員も、互いに相手に何を期待すべきかを理解していて、そのためのよい関係を築くことができました。子どもはまた、障害者として生きていくための重要な生活スキルを獲得することができました。学校外の生活の中でも彼女はこのスキルを使えるようになって、地域の社会福祉課からの直接払いを利用して、個人助手を雇っています。

職務明細

== こうであってほしいこと、こうでは困るということ ==

1. 女性でないと困る。
2. 子どもの気持ちがわかってくれる、年齢がそんなにいない人。
3. 背骨がしっかりしていて、腕の強い人。
4. 子どもの望んでいることをよく聞いて、その言い分を生かしてくれる人。
5. 子どもを安全にしておくのにも「限界」があると知っていること。
6. 子どもが自分の障害を一番よく知っているということを理解していること。
7. 自身のために何が安全で何がそうでないかを、子どもに判断させてくれること。

8. 時々病気になるのがあたりまえというような人は困る。
9. 権力がほしくて仕事をしたいというのは困る。
10. 放課後も喜んで残ってくれる人。(お金はちゃんと払いますよ)
11. 危険を及ぼすような上級生たちの行動がもしもあった時には、それを止めてくれること。
12. 子どもに次のようなことを決めさせてくれること： 子どもがどこに行きたいか、いつ行きたいか、車椅子か。

Job description
musts and must nots.

- 1 Must be a women.
- 2 Must be young enough to understand a young persons mind.
- 3 Must have a strong back and strong arms.
- 4 Must be able to listen to what child wants and use there say (the childs say) when ever possible.
- 5 Must know the limits of keeping a child safe.
- 6 must understand that the child knows there disability best.
- 7 Must let child make judgement on whats safe and whats not for her.
- 8 Must not have a tendency to get ill regulary.
- 9 Must not want job for power?
- 10 Must be willing to stay after school. (you do get payed £)
- 11 Must be able to stop older students who child feels is in dangering them.
- 12 Must let the child deside on things like: where they want to go and when, there wheel chair ect.

ウェストブリッジフォード小学校には、お仕事チームがあります。子どもたちは学校でやらないといけない仕事に志願します。志願した子どもたちは与えられた仕事を行うべく責任を与えられ、誰も点検したりしません。ブライオニは、こう説明します。「私たちはしっかり責任も負います。先生たちは1つの大きなチームで、お仕事チームの子どもたちも1つのチームっていう感じ。ユニークで、特別で、本当の栄誉……つまり、何か大きなものの一員に自分になってる、という感じです。すべての人が何かのことの一員となってかかわっている……というのが、この学校なんです」

キャロルの仕事は、事務所にいくつかあるポットを洗うことです。彼女は次のように言います。「変に聞こえるだろうけど、お友だちと一緒にこのお仕事をやっていて、私、とても楽しいのよ」

チャーリーは実験助手で、学校のデジタル写真の責任者です。次のように彼は言っています。「毎週月曜日の成績達成集会で、僕は写真を撮って、証明書にその写真を入れます。証明書を発行して、その証明書を教室に持って行って渡します。とても責任を感じます。僕はデジタルカメラのモニターで、格好いいんです！」



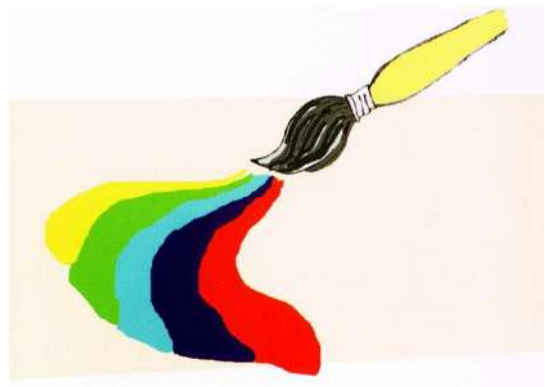
学習は、すべての人にとって目的 のあることだ……

ブラックバーン・カレッジでは、特別学校から転入してきた子どもたちは分けられて「配慮のある」クラスにとどめられるのではなく、個別の支援を受けながら、その子どもたちの興味をかきたてて何をしたいかを子どもたちが見つけられるように、すべての普通クラスを見て回ります。目標はすべての生徒にとって同じであり、高等教育に移行するか職を得ることです。理髪業など実際の雇用に備えるような実用的な技術を習うことができます。



理髪業など実用的な技術を習うことができます。

ハンプステッド学校では、子どもたちの障害を「治そう」としたり、彼らが難しいと思うようなことを教えるのに重点を置いたりしません。それよりもむしろ、子どもたちが皆自分の持っている才能や技術や興味を、それがどんな「レベル」でも、できる限り高いレベルに発展させられるように支援しています。



「ソフィアは、ハンプステッド学校にやってきたはじめてのダウン症児です。彼女は、母親がここに来させたいと思ったので、この学校にやってきました。私たちは、彼女が得意な抽象芸術に重点的に取り組みました。彼女は一般中等教育修了証（GCSE）で第1級の評価を得て、Aレベル試験でAを得ました。彼女は今大学で美術と製版で高等国家ディプロマHND*に取り組んでいます。

*HND = Higher National Diploma

ニッキー・クレーンは、14歳でブラックバーン・カレッジに行きました。彼は「障害があまりに重い」と言われて、普通学校から排除されてしまったのです。個別の計画表が彼のために用意され、多くのことを彼は学びました。21歳になった今、彼は音楽ショップでサポート付きの仕事を得て、コンピューターのスプレッドシートに入力してシートミュージックのカatalog作成の手伝いをしています。





ハンプステッド学校では、中等学校高等部の子どもたちが「エンビジョン」という団体を作り、環境問題に取り組んでいます。彼らは南アフリカの地球サミットに行って環境問題について語り合い、世界中から集まってきた環境活動家に会いました。

エンビジョンの原則

1. すべての人の中にはプラスの変化を作り出そうとする願いと能力がある。
——必要とされるのは、ただ機会である。
2. 行動を通して学ぶのは、単に教えられて学ぶだけよりうんと効果的である。
3. プラスの変化は、変化を生み出している個人や団体の実例からもたらされる。
——「さざ波効果」である。

「エンビジョン」はロンドンにある5つの学校で試行され、続いて40の学校や大学に拡大されました。そして、国のプロジェクトにされようとしています。この活動は創立者たちが運営し、理事会には環境保護や社会改善、教育やビジネス界の著名人が名を連ねています。



親たちも巻き込んで、尊重され、 支えられる……

両親 のためのインクルージョン・グループは、安全で、思いやりにあふれ、
支えとなってくれるような雰囲気です。そんな雰囲気に助けられて、私
は学校について不安に思っていることを話したり、うまくいっていることを称賛したり
できました。もう一度ママになったような気がして、子どもの未来を考えることができ
るようになって、おびえることはもうなくなりました。本当の障害は何だったの
か、わかってきました。障害となっているのは、——モリーではなく——何百年にも
わたって作り上げられてきて、今なお存在する、差別的な態度なのです。(親 アン
ジー・ノースウッド)

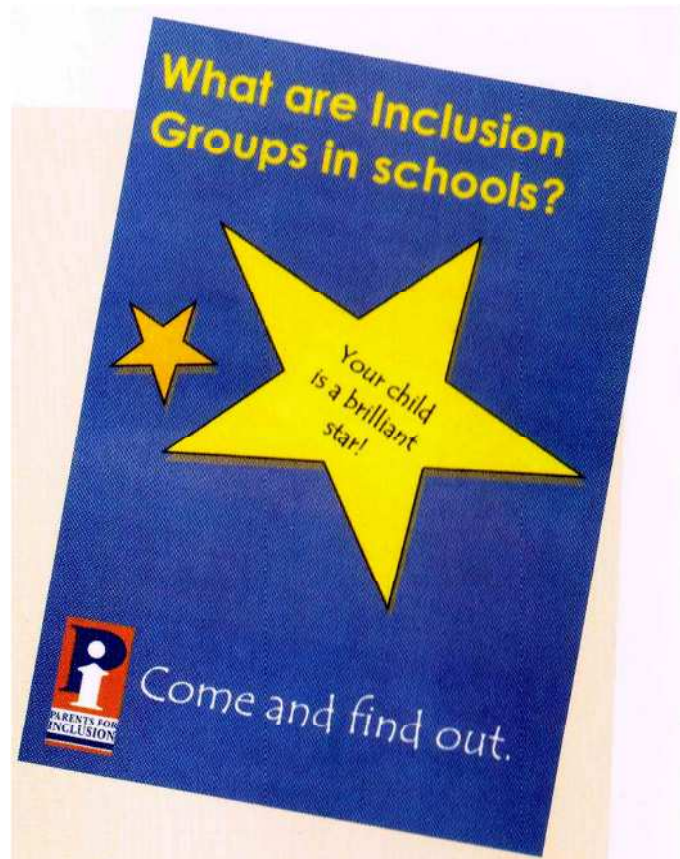


「もう一度ママになったような気がするんです」

ジュビリー学校では、子どもが学習面や行動面で困難を持っているのではないかと心配している親たち全員を、定期的に行われるサポートグループに招待しています。グループを指導するファシリテーターは、親たちがどんなことを心配していて、どんなことが役に立ってくれると思っているかを話せるように手助けします。子どもが抱えている問題のことで決して子どもを責めてはいけないということを、親が思い出せるよう、ファシリテーターは何度も手助けしていきます。集まりの後半には特別支援教育の教師が中に入って、その教師に対して、親たちは学校が自分の子どものためにどんな支援をしてくれたらいいと思っているかを知らせるように促されます。一緒に行動計画を作っていくのです。この「インクルージョン・グループ」は、「インクルージョンを求める親たち

Parents for Inclusion」という第三者機関が支援しています。子どもたちの困難が大きな問題になって排除の恐れを引き起こす前に解決できるよう、手助けしているのです。

ローランドヒル子どもセンターの校長は、自分の担当している幼稚園にやって来るには子どもがまだ小さいような障害児の親たちに、子どもを連れて行って気持ちよく受け入れてもらえ、インクルーシブな幼稚園がどんなところであるか学べるような場が必要だと気がつきました。特別学校でしか受け入れてもらえないと親たちに思ってほしくはないと校長は考えました。そこで、「よちよちさんオポチュニティー親支援グループ Toddler Opportunity Parent Support Group (TOPs)」というインクルーシブなプレイグループを作りました。しばらくして、校長は、もっと小さな子どもの親たちも、子どもができることよりできないことの方に注意を向けがちな医者や医療



『学校の「インクルージョン・グループ」って、どんなもの？』

あなたのお子さんは、すてきなスターなんです！
やって来て、見つけてくださいね。



専門家たちにうまく対処していくために支援が必要であると気がつきました。そこで、障害を持つ赤ちゃんの家族のための「赤ちゃんオポチュニティー親サポートグループ Baby Opportunity Parent Support Group (BOPs)」を始めました。さらに、傘下の幼稚園を出てすばらしい成功を得て普通学校に入学していく子どもたちの支援を行い、78もある幼年施設にはたらきかけて、もっとインクルーシブな施設にしています。ある親は、次のように言っています。

「先生はご存知でしょうか。先生は私の人生の暗黒面を明るく変えてくれたのです」

クリーブズ学校は子どもたちの学校であると同時におとなのための地域学校です。学校は親たちがソーシャルワーカーに出会える場であり、地域のカウンセラーが学校で面談を行います。学校では、介護者グループ、アジアの女性サポートグループや、英語とコンピューターの学習グループを開催しています。

ダビドー幼年学校では、親たちはいつも歓迎されていると感じることができます。

「解決の鍵は、『もしこれが自分の子どもであったなら、私は自分の子が必要とされていないところに行かせたくないと思うだろう』と考えることです」

タックスウッド初等学校では、親たちが運営する「果物と野菜クラブ」を支援しています。親たちは果物と野菜を扱う卸売業者に連絡して、卸値でいろいろなものを買



タックスウッド・コミュニティ・プレイグラウンド・マーケット 「とれたての、新鮮な野菜を、売っています。どうぞご利用ください……」

います。注文をした親たちには7ポンドの袋を作り、金曜日の授業の終了時に運動場で市場を開きます。目的は、健康的な食生活を奨励し、より多くの親たちが学校に来るようにすることです。

ターブズグリーン学校では、すべての教師は自分のクラスの子どもたち一人一人に挨拶をして迎え、さようならを言って送り出すことになっています。教師たちは子どもたちと一緒に外に出ます。そうして毎日両親に会うのです。

「私たちは地位にしがみついたりしません。私たちは親御さんたちに信頼してもらい、子どもたちのために共に動いてほしいのです」

以下の皆様に、心からお礼申し上げます。

(協力校一覧)

Big Wood School
Blacburn College
Bluecoat School
Cleves Primary School
Cottesbrooke Infant School
Davigdor Infant School
Ellis Guilford School
Elliot School
Garden Primary School
George Green's School
Hampstead School

Heatherbrook Primary School
Jubilee Primary School
Kings Avenue Primary School
Kirkhill Primary School
Lister Community School
Rowland Hill Centre for Childhood
Southwark Primary School
Tuckswood Community First School
Turves Green Primary School
West Bridgford Junior School

(参考連絡先)

ABS
The Anti-Bullying Support Team
City of Nottingham Education Department
Tel: 0115 9150940

CSIE
The Centre for Studies on Inclusive Education
New Redland, Frenchay Campus
Coldharbour Lane
Bristol BS16 1QU
Tel: 0117 328 4007
Website: www.inclusion.org.uk

DEE
Disability Equality in Education
Unit GL, Leroy House
436 Essex Road
London N1 3QP
Tel: 020 7359 2855
Website: www.diseed.org.uk

Envision

Website: www.envision.org.uk

Hands Up For....

Website: www.messengers.org.uk

Inclusive Solutions

49 Northcliffe Avenue

Nottingham NG3 6DA

Tel: 0115 955 6045

Website: www.inclusive-solutions.com

MISP

Massage in Schools Programme

Website: www.messageinschools.com

Parents for Inclusion

Unit 2, 70 South Lambeth Road

London SW8 1RL

Tel: 020 7735 7735

Website: www.parentsforinclusion.org

インクルーシブ教育の理論と実践に関する出版物通信販売の広範囲に及ぶ一覧は、以下をご参照ください。

www.diseed.org.uk

www.inclusion.com

インクルーシブ教育の輝ける実例
～可能性のスナップショット～
©2015

発行	2015年 3月23日
調査・執筆	Micheline Mason, Jackie Dearden
デザイン	Chloe Bowles
訳者	豊高明枝
翻訳協力	土井圭子
編集	とれぶ出版部
発行者	放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」

放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」では、インクルーシブな学校や社会を紹介する文書等の翻訳の活動をしています。今後も活動を続けていきたいと考えています。
活動継続のための資金の寄付等歓迎いたします。

振込口座 ゆうちょ銀行 記号14130 番号 18068811
放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」

インクルーシブ教育は、子どもたちが、考え、学び、愛し、お互いを理解し合い、創造的で、共感と思いやりを持ち、助け合って働き遊び、自分たちの住む社会の中で、世界市民として、力強く行動する、調和のとれた人間になっていけるような教育を、すべての子どもたちに保障するという理想に基づいています。

この冊子では、多くの普通課程の幼稚園や、学校、大学が、この理想を、とりわけ現在のところ排除されたり隔離されてしまいやすい子どもたちにとって、現実のものにするために、今変革を行い、実践を行っていることを示しています。

心をふるい立たせるような、未来に対する希望に満ちあふれた実践例が、この冊子の中に紹介されています。

Published by
The Alliance for Inclusive Education
Funded by the Barrow Cadbury Trust

日本語訳：放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」